

国際コンセンサスからみた 整形外科感染対策における最新知見

近年の整形外科手術の進歩はめざましく、低侵襲手技の確立、コンピュータや最新の機器を用いた手術の開発、インプラントの改良などにより手術成績や患者満足度は格段に向上している。しかし術後感染は依然、大きな合併症の一つであり、ひとたび術後感染が発生すると、患者、医療者ともに負担が大きい。そのため、術後感染の予防は重要視され、感染症例では正確な診断に基づく早期の治療開始が望まれる。

整形外科感染の中でも人工関節周囲感染は、バイオフィーム関連感染症であるため、診断、治療に難渋することが多い。このため、人工関節周囲感染の予防・診断・治療に関しては、近年、多くの取り組みがなされている。まず、2010年に米国整形外科学会（AAOS）より診断のためのガイドラインとエビデンスレポートが報告された。2011年には米国の Musculoskeletal Infection Society（MSIS）から人工関節周囲感染の診断基準が提唱され、2012年には米国の Infectious Disease Society of America（IDSA）が治療のためのガイドラインを報告した。そして2013年には第1回国際コンセンサス会議（International Consensus Meeting）が開催され、MSISの診断基準が一部、改訂されて、この診断基準が2015年にアメリカ疾病予防管理センター（CDC）/全米医療安全ネットワーク（NHSN）の人工関節周囲感染の診断基準として採用されている。

このような背景の中で、2018年7月に第2回国際コンセンサス会議が開催された。この会議では人工関節周囲感染だけでなく、整形外科関連の多くの領域の感染について検討され、様々な知見が得られた。特に、人工関節周囲感染以外の整形外科関連感染では、このように世界各国から多数の専門家が集まって討論を行う大規模な会議は初めてであり、その結果は注目されている。

本特集では、日本からの代表者として参加した先生方を中心に第2回国際コンセンサス会議の内容について執筆していただいた。すべての項目において最新知見が詳細に記載されており、読者の臨床の一助となるものと確信する。

（稲葉 裕）